

## 作文コンクール

2023. 12. 9

もう20年以上続けていることがある。作文コンクールの審査員である。国語科教員の宿命である。その年によって、それが2つのときもあれば、3つのときもある。複数の作文コンクールを担当すると、それぞれテーマが違うため、作品を読んでいておもしろい。また、課せられる使命も違う。0次審査や1次審査といって、出されてきた作品をすべて読み、そこから指定された作品数に絞る作業をすることがある。あるいは、2次審査や最終審査のように、絞られた作品から、点数を付け、賞を決めていくこともある。表彰式に出席し、講評を述べることもある。

いずれにしても、長きにわたり携わっていると、いろいろなことがわかる。中学生の作文力、文章を書く力はどうなったのか。上がっていないことは確かである。では、下がったのか。一般的なイメージよりは下がってはいない。

なぜ、そんなことがわかるのか。出されてきた作品をすべて読む審査をすると、文章を書くのが苦手な生徒の作品も、得意な生徒の作品も読むことができる。すると、実態というものがよくわかる。作文コンクールに出すのである。生徒は、原稿用紙に、正しく丁寧な文字で書こうとする。すなわち、それが生徒の力である。

漢字の間違いや、助詞の抜け、俗な表現、改行の甘さなどが散見される。俗な表現や助詞の抜けなどは、改まった正しい表現と普段使っている表現の使い分けができていないということだろう。国語科教育の問題である。国語と日本語の違いの問題である。やはり、改まった正しい表現を身に付けさせる必要がある。原稿用紙に綴られた生徒の作品が、そのことを教えてくれる。

一方、最終審査に残る作品は、構成が考えられ、誤字脱字などなく、表現力も高い。書き慣れている感じがする。20年以上携わってくるとわかることがある。ユニークな作品、突き出たような作品は減ってきている。逆に、優しさや思いやりに満ちた作品が増えている。

中学生の優しさや思いやりは、20年経っても何ら変わらない。子どもには、そういった一面がある。それを文章にできる機会があることはよい。それが、作文コンクールである。原稿用紙に3枚から5枚ほど書くため、普段書いている量と比べると、かなり多いだろう。全体構成を考えないと、自分の思いや考えを読む人に伝えるのはむずかしくなる。経験も必要である。ベースになるのは、国語の授業をはじめ各教科の授業や学校行事などの際に、どれだけ書いているかである。ここ20年で、中学生が年間に書く量が増えているかということ、増えてはいないだろう。書くことは考えることである。思考力や表現力に影響が出る。すなわち、学力の根幹を大きく左右するということである。

今年も、中学生らしい等身大の表現、自分の思いや考えを素直に伝える文章、読み手を惹き付ける魅力的な作品に出会うことができた。作文コンクールの審査により、中学生の文章を読む機会をいただけるのは幸せなことである。